

## 2021 年度第 1 回研究会（通算第 1 回目）

- 日時：2021 年 5 月 30 日（日）14:00–18:00
- 場所：オンライン会議室
- 共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，東北大学大学院情報科学研究科「言語変化・変異研究ユニット」

「文法化」をテーマとして，2名のメンバーが口頭発表し，あらかじめ指定された3名のディスカッサントがコメントを述べたほか，活発な意見交換がなされた。

講師 1：佐藤陽介（AA 研共同研究員，津田塾大学）

題目：Crossed-Control in Indonesian: When Passive Morphology Meets Auxiliarization

本発表では、現代インドネシア語に観察される交差コントロール（Crossed-Control/CC）と呼ばれる現象の性質についての研究成果を紹介した。同言語では、*mau*（‘to want’）, *ingin*（‘to want’）や *coba*（‘to try’）などの動詞が、(1)のように、その節補部として受動態を選択する場合、いわゆる主語コントロール読みだけでなく、交差コントロール読み（CC reading）を許すことが報告されている。(1)では、従属節の述語の目的役割を担う *anak itu* が主節の主語の位置に、そして従属節の諸語役割と主節の主語役割を担う *ibu* が従属節の斜格の位置に生じることにより、述語とその意味役割の担い手が交差している特殊な構造が生まれている。

(1) *Anak itu mau/ingin. di-cium oleh ibu.*  
child that want PASS-kiss by mother  
‘The child wants to be kissed by the mother.’ (主語コントロール読み)  
‘The mother wants to kiss the child.’ (交差コントロール読み)

今回の発表では、この現象が、インドネシア語の受動態形態素の通時的発達、そして上記の動詞が現在進行形で機能的再構築化を受けていること、から生じるという提案を行った。さらに、本仮説の中心的提案である機能的再構築化が実際に

起こっていることを示す証拠として、接辞上昇がインドネシア語の CC 動詞にも例外的に観察されること、*mau* 本来の *want* という語彙的意味が助動詞しか生じえない位置においても CC 読みでは生起すること、そして等位接続や *yes-no* 疑問文で CC 動詞がその補部の動詞と構造的に隔離された場合には CC 読みが不可能になること、を挙げた。

講師 2：小川芳樹（AA 研共同研究員，東北大学）

「「必要」の文法化と範疇的多義性，および，所有動詞の類型論について」

日本語の名詞「必要」には、「必要だ」「必要がある／ない」「必要としている」のようにさまざまな構文に生じるだけでなく、「A には B が必要だ」のように与格主語と主格目的語を取る形容動詞構文もあれば、「太郎は来る必要がある」のように連体修飾節に後続する存在構文もある。しかし、後者では、「?? 太郎には来る必要がある」とは言えないし、「?? 君の来る必要はない」のような属格主語文も容認しない。この点で、「必要」は、「理由・時間」のような純粋な名詞に基づく通常の連体修飾節前接構文とは異なる。また、「A は B する必要（が）ない」「A は B が必要ない」のように否定文では主格助詞を落とせるが、「A は B する必要がある」「A は B が必要ある」は非文である。

本発表では、この「必要」が「である」「ある」「ない」のように異なる述部と結びつく場合に、それぞれ、異なる程度に文法化していると主張することにより、上記のような格標示の制限を説明できるばかりでなく、否定文と肯定文の違いも、英語の助動詞 *need* が否定極性をもつという事実と共通の説明が可能であると論じた。また、Harves and Kayne(2012)の通言語的一般化を踏まえると、日本語には「所有関係」を表す他動詞 *HAVE* が存在しないことから、「必要」を表す他動詞も存在しないと予測されるが、実際、この予測が支持されるとも論じた。

ディスカッサント：

田中智之（AA 研共同研究員，名古屋大学）

石崎保明（AA 研共同研究員，南山大学）

青木博史（AA 研共同研究員，九州大学）